

ました。県庁林業課から呼び出され、木炭検査員を指令されました。当時木炭生産地は、西の島根・東の岩手といって日本の二大生産地でした。農林省で講習会があり東京にも行きました。

## 運命に従い

### 内地―蒙古間二回の戦務

山形県 大沼 祐三郎

私は大正十三年三月二十七日、山形県東村山郡成生村字小関三九七番地の国井家の三男として生まれました。昭和十六年徴集兵として兵隊検査を受け、現役兵として昭和十七年二月十日、独立歩兵第八十三大隊（勝兵团）要員として、盛岡の歩兵第百五連隊（第四十七師団）へ入営しました。

当時は既に大東亜戦は勃発し、連勝連勝の気運の時でありましたので、初めての軍隊生活の一週間は緊張の連続でありました。しかし、私達はすでに野戦要員

としての入営でありましたから、隊内では客分と同じ扱いで兵舎を仮宿泊しているような状況でありました。

二月十七日、盛岡連隊の営門をラッパの吹奏のうちに出て、駅に向かって出発しました。途中道路の両側には日の丸の小旗を振り、万歳、万歳の声援でありました。あの時の情景と感激は今でも私の心に映っています。年老いたお婆さんが私の顔を見て「万歳、元気で帰って来てね」と励ましてくれました。あの言葉を聞いたとき、自分は思わずほろりと涙が出たことを忘れられません。

輸送列車は貨車で、外は一面の銀世界、寒い貨車の中で、皆で体を寄せ合いながら、翌々日の十九日門司駅に着き、直ちに港から乗船、門司港を出帆。翌二十日朝鮮の釜山港上陸、輸送列車で北上、満支国境の山海関を通過したのは二十三日でありました。二月といえば北支那の地は寒かったです。小便に行ったら小便が凍りついて、つららになっています。

右手に万里の長城を眺めながら列車はさらに走りました。勤務地の山西省汾陽（太原西南方）に到着した

のは二月二十五日でありました。同日、直ちに独立歩兵第八十三大隊第四中隊に編入され、いよいよ本格的な軍隊生活に入りました。

朝の起床から夜の消燈までの初年兵の生活は、今まで味わったことのない、つらいつらい毎日でありました。演習、訓練から内務班での生活、息つく暇もない緊張の連続で、精神的にも肉体的にも、現在の若い人々では想像もつかぬことでありましょう。しかし、この厳格な訓練が、実際は戦闘や行軍において自分の命を守り抜くのに役立つことを知ったのは後々のことでありました。

やっと寒気厳しい北支の冬をしのぎ、春も過ぎ、初夏を迎えたころ、ようやく一期の検閲も終り、一応は基本教育を修得した兵隊になったのであります。我々が内地から出発する頃は、独立歩兵第八十三大隊は独立混成第十六旅団の隷下でありましたが、その親元の旅団は四月八日第六十九師団として編成替えとなっていたことを後に知らされました。

一期検閲前後、部隊は汾陽地区の警備の任に就いて

いました。六月二十五、二十六日、康寧堡付近の戦闘に参加、初陣でしたから、否応なしに心が引き締まる思いですが無我夢中でありました。頭の上を「ヒュー、ヒュー」と敵弾の音がすると反射的に頸を引っ込めてしまう。古年兵は平気で頸など引っ込めもしない。

古年兵は「ヒュー」という音の時は弾が頭の上高く飛んで行くのだから決して当たらないんだ。竹を割ったのを打ち合わせたような「パキ、パキ」という音は至近距離の弾丸だから注意しろ」と教えてくれました。このことは内地の教育、訓練では教えられない、野戦での実地教育であります。これを修得するか、しないかが生死を分けてしまうのですから、聞く方も真剣でありました。

この戦闘では、友軍の戦死者は五人程度で、敵の損害は多大であったと聞きました。その後、勝兵団は六月二十九日から七月三日まで對晉襄陵西方地区の作戦に参加しました。晉とは山西省の旧省名であると上官から教えてもらいました。我が兵団は主として山西省で作戦していましたので、その作戦や戦闘名に「晉」

の字が付くことが多かったと知りました。

七月十日からまた作戦行動に出て、同月二十二口までは対晉汾陽東南方地区作戦参加です。山西省は山岳地帯で岩山が露出し、その岩山は登ることもできないので、進軍するには、ぐるぐると遠回りをしなければならず、直線の何倍もの道程を歩かなければなりません。まさに、シルクロードの旅と同じであります。砂山と木も生えていない岩山続きであります。

喉が渴いて水が飲みたいと思っていた時、道路の右側の岩肌からこんこんと清水が湧きでているのを見付けました。乾いた喉に思う存分水を飲んだり、頭から水をかぶる者もいました。まさに、天の恵みとはこのことで、水の有り難さ、美味さをつくづく知らされました。この時は、遠い山形県の故郷で飲んだ清水を思い出し、次への活力を生み出してまた行軍を続けました。

兵隊の本分は射撃、銃剣術、行軍だと教わりましたが、この行軍力が直ちに戦力であると思います。平地であれば、馬も自動車もあります、鉄道も飛行機も

利用できない当時の作戦行動は、一歩七五センチの歩幅を交互に出しながら、何十キロ、何百キロを作戦行動するのが支那大陸での戦いでありました。

一応この作戦も終結しましたが、翌日の七月二十三日から八月三日までは対中国第六十一軍作戦に参加。八月二十七日まで、洪趙西方地区の対山西軍（閻錫山軍）作戦に参加と、暇無き作戦、戦闘に参加しながら、部隊は作戦以外は十二月十四日まで、汾陽地区（汾陽、文水、交城）の警備に任じていました。

そうした、あわただしい日々を過ごしていた最中の十二月十五日、戦車第十二連隊第二中隊に転属を命ずるという命令をもらいました。

昭和十八年一月九日文水を出発、十日汾陽出発、同年一月十五日内蒙古の包頭にある部隊着任、包頭は綏遠省綏遠の西方にあり、戦車第三師団は駐蒙軍の隷下で、支那派遣軍の虎の子でありました。昭和十八年三月上等兵、九月一日兵長を命ぜられました、下士官候補者教育のため分遣を命ぜられ、九月二十八日包頭を出発、十月二日、満支国境の山海関を今度は支那側

から満州へと入り、翌三日には鮮満国境安東を過ぎ鴨緑江を渡り、勝部隊へ入った昭和十七年の時とは逆に、十月六日、朝鮮釜山港から下関港へと着いたのであります。

あわただしい、内地―朝鮮―北支―蒙古―満州―朝鮮―内地という行程で、昭和十八年十月九日、千葉の陸軍戦車学校に入校しました。歩兵教育を受けた歩兵隊から何も知らない戦車学校であります。戦車のことを一から勉強が始まりました。当時はまだソ連は参戦していませんでしたが、学校の仲間たちは「おそろくは、我々は満州に行くことになるんじゃないかなろうか」などと噂していたものでした。約六カ月間の教育を受け卒業、再び原隊復帰の命令を受け、またまた内地とお別れ、昭和十八年十二月十五日、陸軍伍長に任じられました。昭和十九年三月二十二日、帰隊のため下関出港、同日釜山上陸、二十四日鮮満国境安東通過、二十七日満支国境山海関通過、二十九日包頭着で、また、振り出しに戻りました。

約半年ぶりで中隊の戦友と顔を合わせると、戦友の

彼等は「内地の状況はどうだったか」「生活はどうだったか」と、皆は一度内地へ帰って来た我々をうらやましがっているろと聞くのでした。

着任間もない翌四月一日、昭和十九年軍令甲第三十一号に據り臨時動員下令（編成改正）となり、同日戊第一四〇八部隊要員として河崎部隊付を命ぜられました。せっかく慣れた中隊の皆とも別れなければならぬ。命令には絶対服従しなければならぬ。どうして自分は転属しなければならぬのかと思いつつ、中隊の戦友とも別れ河崎隊員として約八カ月間、包頭地区の警備の任に当たっていました。

いつ戦車に乗って満州へ行くのであろうかなどと考えながらの毎日でした。せっかく苦勞して教育を受けた戦車なのですから。ところが、翌年昭和二十年一月十五日付をもって無線通信修業を命ぜられ、三月一日陸軍軍曹に任ぜられました。住み慣れた包頭を、四月五日出発、同月十日朝鮮京城（廣州敵舎）に到着し、無線の修業を行いました。

しかし、戦況は思わしくなく、刻々と無線に入って

くるのは、我軍の敗戦の情報でした。八月十五日、日本軍は連合軍の前に無条件降伏となり終戦を迎えてしまいました。私は大隊本部へ命令を受領に行き、終戦の命令を受け取って隊に戻りましたら、皆は昼食だというのに箸を取る者もなく、ただ茫然として気の抜けた人形のようにでした。

だが、今後どうなるものやら判らないまま、十月二日除隊を命ぜられ、釜山港より復員船にて下関港に上陸、それぞれわずかな旅費を支給され、明日からの健康を誓いあって最後の別れを惜しみながら家路に着いたのであります。

家に帰って見ると、父母は健在で、兄も復員していました。私はしばらくの間家業を手伝っているうちに、現在の大沼家の婿養子となり、妻は他界しましたが、長男夫婦、孫一人の四人暮らして農業に従事しながら戦没した戦友の冥福を祈る今日このごろであります。

内地―朝鮮―中国―包頭と、軍命とは申せ、歩兵―戦車兵―戦車学校―戊部隊―通信隊と席の温まるを知らぬ軍務の連続三年九カ月でありました。